

FUEKI

vol.66



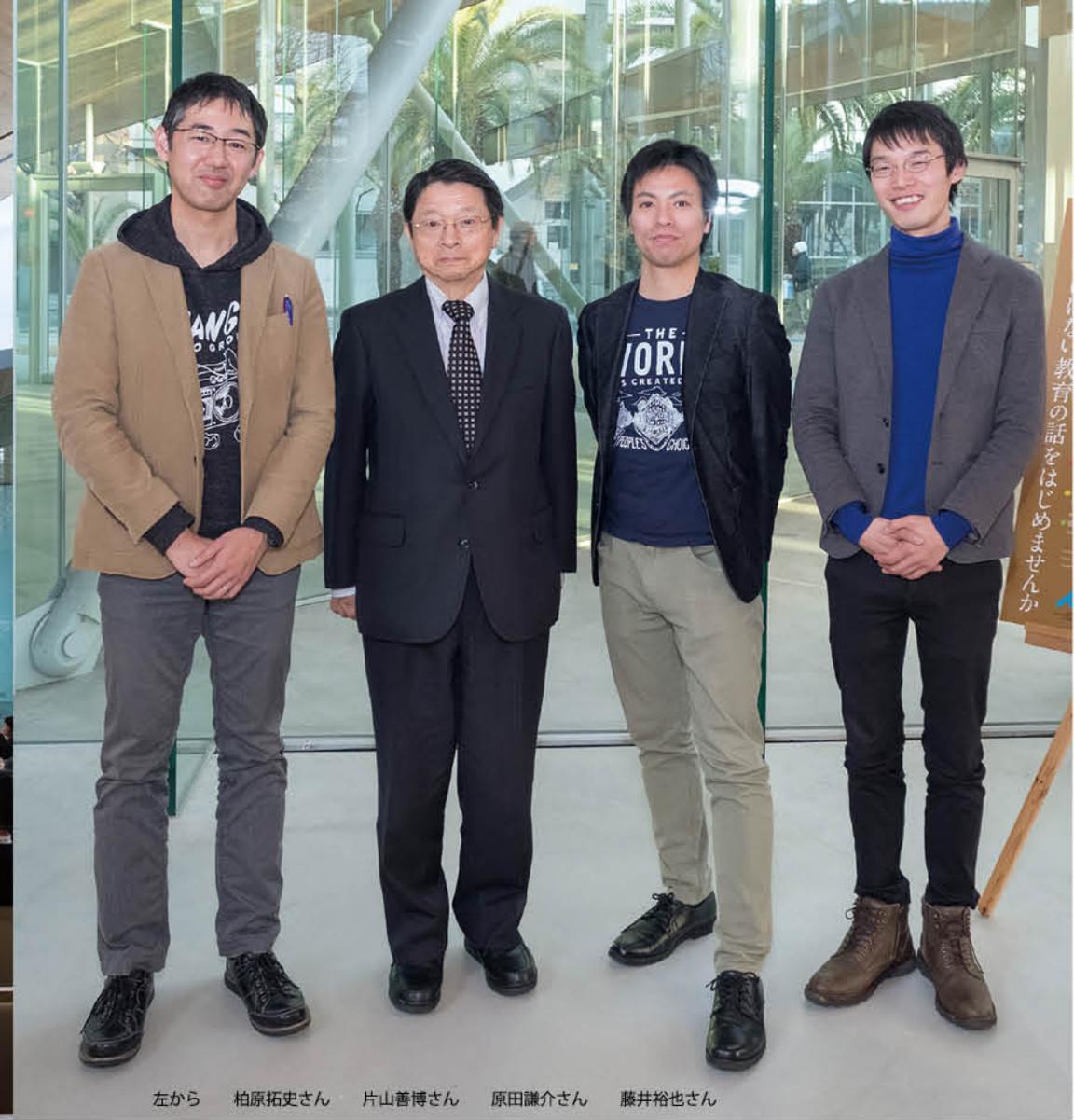
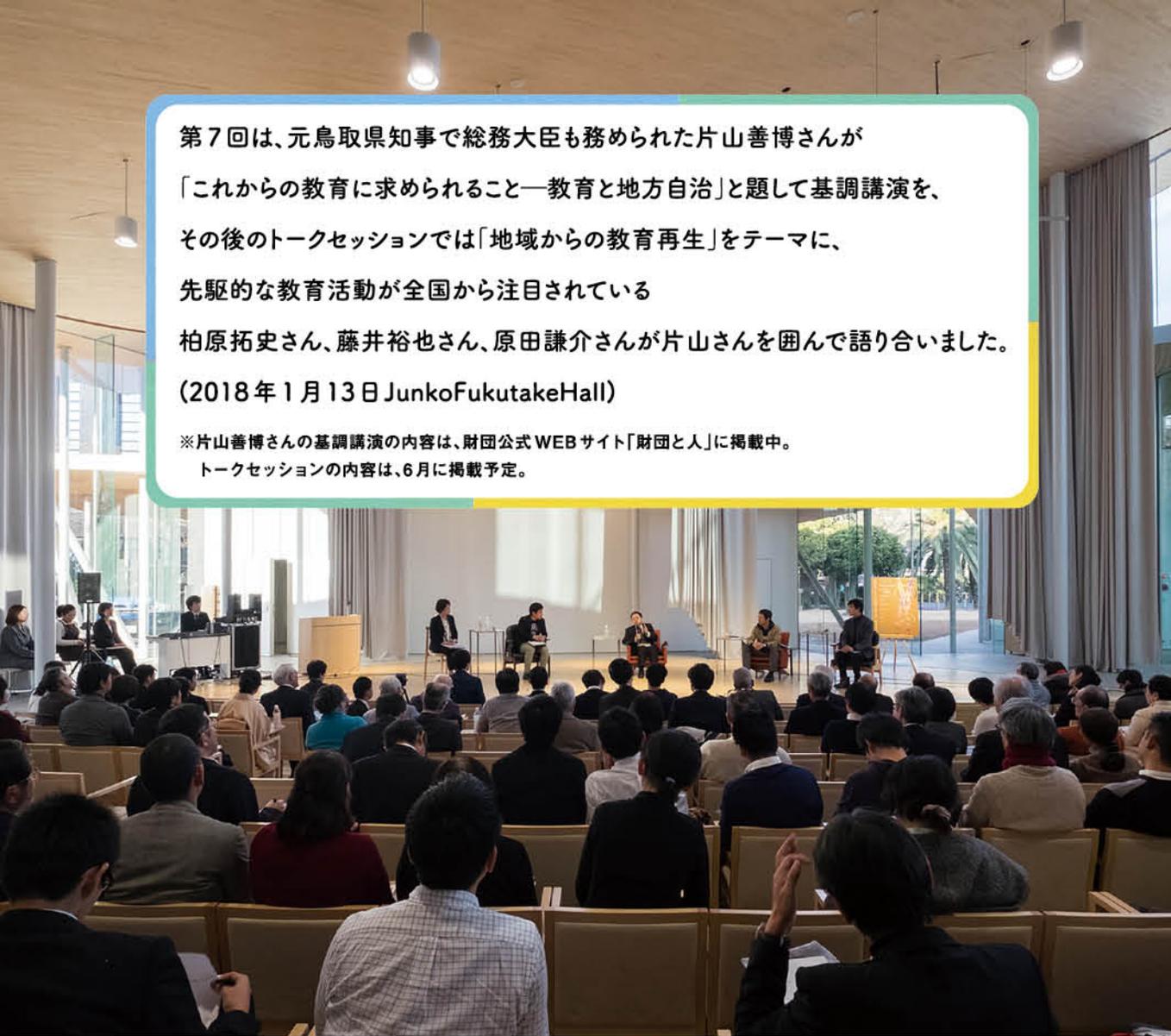
教科書にない
教育の話をしませんか。

「ここに生きる、ここで創る」
「地域からの教育再生」
vol.7

教科書にない教育の話をしませんか。

第7回は、元鳥取県知事で総務大臣も務められた片山善博さんが「これからの教育に求められること—教育と地方自治」と題して基調講演を、その後のトークセッションでは「地域からの教育再生」をテーマに、先駆的な教育活動が全国から注目されている柏原拓史さん、藤井裕也さん、原田謙介さんが片山さんを囲んで語り合いました。(2018年1月13日 JunkoFukutakeHall)

※片山善博さんの基調講演の内容は、財団公式WEBサイト「財団と人」に掲載中。トークセッションの内容は、6月に掲載予定。



左から 柏原拓史さん 片山善博さん 原田謙介さん 藤井裕也さん

●藤井裕也

/ 特定非営利活動法人山村エンタープライズ代表

1986年岡山市生まれ。岡山一宮高校を卒業し岡山大学へ進学。高校から大学にかけて地域創生と国際社会について学び、大学在学中に国際協力団体「たわし」を設立。地域おこし協力隊として岡山県美作市に拠点を移し地域づくりに取り組む。地域人材の育成と還流・地域課題の解決を目指す組織、NPO法人山村エンタープライズを設立。2016年には「岡山県地域おこし協力隊ネットワーク会議」を設立。同年「総務省地域おこし協力隊サポートデスク上級相談員」に就任し地域おこし協力隊のサポートを務める。



●柏原拓史

/ NPO法人だっぴ 代表

1978年岡山市生まれ。名古屋大学大学院(理学研究科)修了後、日本気象協会に入社。地域に根差して社会課題に向き合うため2006年に岡山県環境保全事業団に転職、環境教育の普及や人材育成の業務を通じた社会教育活動に従事する。その傍ら、2007年から有志の勉強会やイベントの開催を始め2013年にNPO法人だっぴを設立。これまで1000人以上の若者と地域の大人との出会いと交流機会を生み、若者の成長と地域活動の活性化に繋がってきた。谷口澄夫教育教育奨励賞、ESDアワード地域賞を受賞。

●原田謙介氏

/ 特定非営利活動法人YouthCreate代表理事 岡山大学非常勤講師

1986年岡山県生まれ。東京大学法学部卒。大学3年時に20代の投票率向上を目指し「学生団体ivote」を設立。卒業後の2012年4月インターネット選挙運動解禁を目指し「OneVoiceCampaign」を立ち上げる。2012年11月YouthCreateを設立。2015年6月には参議院で「選挙権年齢引き下げ」に関して意見陳述を行った。文科省・総務省が2016年秋に作成し全高校生に配布した「政治や選挙等に関する高校生向け副教材」の執筆者でもある。全国の約70の中高で1万人以上の10代に主権者教育の出前授業の実践を行ったほか教員向け研修会なども実施。



●片山善博

/ 元鳥取県知事

早稲田大学大学院政治学研究所教授 1951年岡山市生まれ。74年東京大学法学部卒業、自治省に入省。能代税務署長、自治省固定資産課長などを経て、99年鳥取県知事(2期)。07年4月から慶應義塾大学教授、10年9月から11年9月まで総務大臣。17年4月から早稲田大学大学院政治学研究所教授。併せて鳥取大学客員教授、「デジタル文化財創出機構」理事、「角川文化振興財団・城山三郎賞」選考委員、「活字文化推進会議」委員などを務める。主要著書に「地方自治と図書館」(共著)(勁草書房 2016年)、「民主主義を立て直す 日本を診る2」(岩波書店 2015年)、「片山善博の自治体自立塾」(日本経済新聞社 2015年)など。





—教育と自治について教育活動の取り組みの中で、教育行政の壁を感じるようになるようです。

原田 個別の課題じゃなくて、教育委員会や行政のマネジメントや仕組みの課題の解決に、当事者の中学生、高校生、あるいは小学生とどこまで共有すればよいのか、巻き込めばよいのか悩ましいです。

片山 前の大学で学部の担当をしていた時、ゼミ学生には必ず実践をやらせました。例えば、区議会に傍聴に行ったり、地域の課題を区議会に請願する能動的な行動をしたり、教育委員会のあり方を考えようというので、まずは教育委員会議に出て行ってみたり。自分たちが門戸を開いて何らかの変化が起きる、そういう一つの成功体験をすると、大きな力になると思います。

柏原 教育と自治という中で、責任を明確にして役割を発揮してもらわなければいけないという片山さんのお話を伺いながら、地方自治の伝言ゲーム的なところが課題ではないかと思いました。NPOの代表をしていますので、文科省の担当の方と話したりする場合もありますし、いろいろな提言を読んだりしています。とてもいいことを書いてあるし、担当の方もすごく熱心

る作業のほとんどを、今は中央がしています。課題は現場にあつてそこにフィールドがあり、当事者もそこにいるわけですから、現場に近いところで課題を整理して、それを政策につなげていかなければならない。本当はそのプロセス、現場に近いところでの企画力が大切なんです。

—教育活動の資金について
様々な活動に取り組んでいくなかで、大きな課題となるのが資金の問題

藤井 学校教育は教育委員会の管轄です。地域側から教育的な事業をしていく場合、助成金や公金で運営するというのがメインになっていますが、公的な事業だけど、行政と違うところに、もう一つ下に組織があつて、そこに資金循環を作っていくような、そういう取り組みが必要だと思っています。みんなて何かを作つて、みんなて売つて、資金を得て、それを活用して、みんなて教育のために使っていくという仕組みです。公金だけの活動では、地域側で主体が持てないと思つています。

柏原 教育というのは、受益者からお金をなかなかいただくにくい。学び直してあれば、社会人の方から対価をいただいでやればいいので、大学や生涯学習センターなど



で、本当によく考えられています。にもかかわらず、地方行政の教育現場に行くと、その意図が伝わっていないくて、政策として義務的にやらされている感じがあり、ビルドアンドビルドにもなっています。

藤井 地域、起こし協力隊は、特別交付税で運用されていて、内容については地方自治体の裁量が大きい制度です。しかし、制度が国から道府県、市町村降りてくる中で制度の趣旨が十分伝わらないということがあります。

片山 課題は現場にあるわけです。ところが、その解決を考えて企画して、政策にす

で対応できます。小学生や中学生はもちろんです。義務教育でない高校生でも受益者からお金をいただくのはなかなか難しい。その中でどうやって回していけばいいかというのがあります。行政に頼らない資金循環を作ると言った時に、地域経済に何かしら資金提供してもらつたり、連携できないかなと思つています。

原田 まさに地域の企業と連携するのはありだと思つています。もう一つ、行政のなかで絶対この事業にはこんな予算はいらねいだろうという、部分がおそらくあるはずなんです。地域で活動していくと同時に、主権者として行政、政治をちゃんと見張つて、その





ちょっとやり方を変えましょうということも模索しつついききたいです。

片山 小さい自治体でもかなりの額を使っているわけです。その中に無駄なものがないか、2つないわけがない、必ずあります。要するに選択の問題です。プライオリティ、優先順位の付け方の問題です。

政策の優先順位、取捨選択、本来これは議会がやるべきです。首長が予算案を作りますが、それが本当に妥当かどうかというのがオープンな場で議論して決めるのが議会です。議会に予算の決定権があります。議会はちゃんと議論していますか？ 予算案を吟味していますか？ 首長が出したものを丸のみしていませんか？ 住民の意見、納税者の意見、NPOの皆さんなどの意見を聞いて、優先度の高い事業を決めていますか？

それから、ドネーション(donation) ー寄付の復活。日本は基本的に寄付文化というのは低調ですが、日本のこれからの社会にとって大切なことです。地域レベルでも社会貢献をしている企業に人材が集まるとか、投資される時代にだんだん来ているということだと思っています。

ー今後どのような人材が必要だと思いま

すか

「教育再生」のカギを握るのは、やはり人。求められる人材とは……

藤井 地域おこし協力隊に関しては、自分たちが率先して、自立的なマインドを持って事業を作っていく人材を地方に置きたいし、行政と地域をつなぐという役割もしっかり持ってほしいと思っています。一方で、地域の受け入れ態勢もインフラであり、地域側の人材育成も必要だと思っています。

柏原 居場所を作れる力を持った人。いろんな関係性の中で人は生きてるので、その中で自分の居場所を自分の周りにしっかり作れる人が、イノベーションを起こせる人につながっていくと思っています。

原田 前向きな暇な人が増えたらいいかなと思いますが、どうでしょうか。暇な人、暇を持て余しているという意味ではなくて、本業や本職、自分のやりたいことがあるけど、それ以外の時間もちゃんと生み出せて、いろんなことに関わったり、知ったことをどんどん広げてくれる人。例えば専門的な人たちの話をうまく変換して周りに広げていく、支えていく、そんな前向きな暇な人。僕自身もそういう人になりたいなと思っています。

片山 まず一般論から申しますと、企業から求められるのはグローバルな人材。しかし、日本の中を見ると、地域をどうやって支えていくのかということが大きな課題です。地域を大切にすると、地域を支える人材も、グローバル人材と同様、もしくは勝るとも劣らないだけの重要性があると思います。郷土の歴史とか文化、伝統とか産業とか、そういう産業の可能性があるか、資源がどんなものがあるか、そういうことをもっと丁寧に子どもたちに教えていく、そういう中から、自分がここで人生を全うして、みんなと一緒に地域社会を支えていくという、そういう気概も育っていくと思います。





やがて風景になるものづくりをテーマに
西粟倉村で家具や暮らしの道具をつくらせる
ようびの山口祐史さんから椅子の説明



交流会は、スケルトンのランチボックス「瀬戸内のめぐみに出会う玉結び+α」と
岡山県産茶葉を100%使用した「瀬戸内茶」を片手に交流。
テーブルには洗濯バサミのデコレーション。
トークセッションの椅子は、西粟倉村に工房を構える「ようび」にご協力いただきました。



玉野商業高校(現・玉野商工高校)生徒の
アイデアと地元食材の
美味しさを生かした「玉結び」で
玉野の魅力を発信

コーディネーターの灰原抄織さん



今回のテーマとも親和する美術家・高本敦基さんの
人に見立てた洗濯バサミの作品をモチーフに



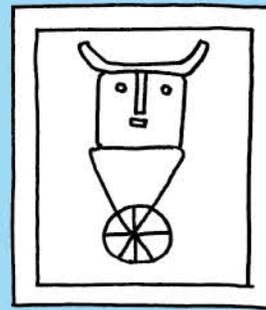
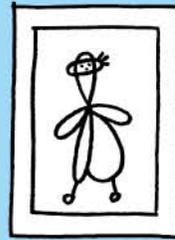
岡山のお茶が岡山で日常的に消費される
スタイルを目指す生産者の青山雅史さん



1960年代～



国吉康雄「化粧」
いい絵だなあ…
岡山出身の画家なのか…



とにかく忙しかったなあ。でもそんな生活の中で、私の心をなぐさめてくれたのは美術品だった。妻といっしょに画廊を回ったりしたものだ

1960年代からいくつかの作品を買っていたが、1979年、この作品に出会った。

教育・文化にたずさわる企業として社格を向上させ、社員の情操を高めることは大切なことだ。将来は社屋に展示しよう。郷土岡山の文化の向上にもささかやかなりとも貢献したい

このときから福武書店の国吉康雄作品収集が始まったんだ。

戦後の自由な時代、何か事業を立ち上げようと試行錯誤を重ねた。1950年、富士出版という会社をつくったものの倒産してしまい、その後福武書店として、生徒手帳の印刷と年賀状の手本集を印刷し、富士出版時代の借金を返済。1955年に福武書店を創業したんだ

参考文献：「福武書店30年史」
(福武書店、1986年)

協力：岡山大学国吉康雄記念・
美術教育研究と地域創生講座
クニヨシパートナーズ

1950年代～



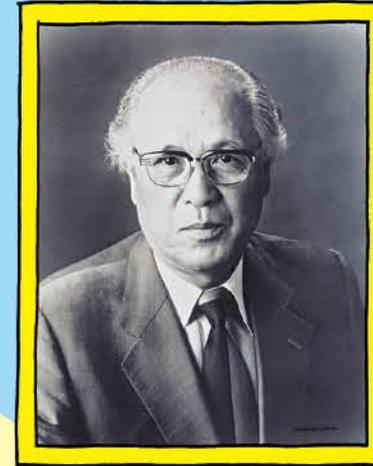
福武コレクションって、いつ、どのようにして始まったのかな？クニヨシガールが調べてみました。

福武コレクションとは…

福武総一郎氏(ベネッセホールディングス名誉顧問、福武教育文化振興財団名誉顧問、福武財団理事長)が所蔵する、国吉康雄作品および資料。絵画、版画、写真、遺品など計600点以上をかぞえる。

福武コレクション
ものがたり

エピソード1
クニヨシとの出会い



この人が福武書店の創業社長、福武哲彦さんね。この人が美術作品のコレクションを始めたのよね。



戦争中は、青少年義勇軍を引率して夢にまで見た満州に渡った。満州は想像以上に広大だったな～



私は1916(大正5)年、岡山県吉備郡日近村(現在の岡山市北区日近)に生まれ、戦前は小学校の教師だったんだ。とても人気のある先生だったんだよ



1930年代



岡山に夜間中学校をつくる会

様々な事情で義務教育を修了できなかった人や、学び直しを希望する人たちを対象に、ボランティアが自主運営する岡山县内初の「夜間中学校」を毎月2回開いている。年齢・国籍に関係なく、学びたい人すべてに教育の機会を確保し、共に学び成長していく学びの場の提供と、公立夜間中学校の設置に向けての活動、またそれを必要とする人々がいることを広く知ってもらうことが目的。受講生が学びを通して自己肯定感を強め、社会で活躍していくことを願い活動している。

設立
2017年4月1日
主な活動場所
岡山国際交流センター



地域課題の解決に向け、岡山県の教育と文化による人づくり・地域づくりに取り組む方々を応援する「福武教育文化活動助成」。今年度は教育・文化を合わせて127団体(個人)が助成対象に決定しました。そのうち、3ヵ年継続助成に決定した11団体の活動を3回に分けてご紹介します。



一般社団法人
岡山県ユニバーサルスポーツ文化協会
岡山デビルバスターズ

設立
2015年4月25日
主な活動場所
岡山県立岡山盲学校

岡山県内の視覚障がい者サッカー競技の普及・発展と競技の向上、視覚障がいに関わる啓発のほか、自ら考えて配慮・支援ができる健常者を育成することを目的に設立。視覚障がい者が安全に自立した生活ができ、障がい者・健常者が当たり前混ざり合った地域社会を実現させるため、サッカーに興味のある小学生とその保護者を中心にブラインドサッカーの体験から視覚障がいについて学べる機会を提供し、理解を深める活動をしている。

江戸時代の建物で築約210年になる古民家、つくぼ片山家。平庭形式の庭園が広がり、戦後につくられた能舞台の大きな松の木の背景が印象的である。この古民家と共に受け継がれてきた地域の伝統文化を後世に残すため、そしてこの場が地域住民に開かれた「集いの場」となるために季節ごとのイベントや地域活動を開催している。住民が集い、同じ地域であっても年齢や生活状況などが異なることで見えなかったそれぞれの課題を共有し、より広い視野で解決していこうと活動を進めている。



特定非営利活動法人
つくぼ片山家プロジェクト

設立
2014年10月15日
主な活動場所
倉敷市帯高
「つくぼ片山家」



FACE

株式会社ジブンノオト 代表取締役

大野 圭司さん

「その仕事は本当に自分の仕事なのかを考え抜く。それが私の考える起業家教育です」と強い意志を感じさせるまっすぐな視線で答える大野さん。子どもへの起業家教育と聞くと、中高生で会社を起こすようなプログラムを連想しがちであるが、大野さんの考えは違う。「これだけ高齢化と人口減が進むと、将来、島にUターンして雇ってもらおうとしても、役場が学校くらいしか無いんです。なら

「起業家教育ってなに？」
過疎と高齢の島、山口県周防大島を舞台に小学生・中学生・高校生に向けた「実践型キャリア教育」事業を手掛ける大野圭司さん。彼の取り組みは全国的に注目されており、2018年2月、経済産業省「創業機運醸成賞」も受賞しています。大野さんに「起業家教育」の目的について伺ってきました。

ば自分で仕事を創りだすスキルを子どものうちから身に着けてしまおうと」
大野さんは大阪芸術大学を卒業後、大阪や東京で働いていたが、26歳で故郷の山口県周防大島にUターン。「島おこし」プロデュースする会社を起こした。大野さんの島への想いは中学時代にまで遡る。地域の広報誌にあった「周防大島(旧東和町)の高齢化率は41.5%で日本」という記述が、その当時言われていた2050年の日本の高齢化率よりも高いことに驚いた。そして「いつか自分が何とかなる！」と決意、大学時代には周防大島を「定住型リゾート」としての活路を見出すブランドデザインを作成した。「島づくり」を教育と結びつけることは、周防大島町立東和中学校のコミュニティ・スクールの運営に参加したことから本格的に始まる。2011年より「起業家精神を育む」をテーマに総合的な学習の時間を使って実施されているキャリア教育の授業づくりのコーディネーターとして活動している。たとえば、中学2年で保護者に対し、自分たちの立てた「事業計画」をプレゼンテーションし、「株500円の資金を集め、近隣の道の駅での実践販売を行う。中学3年になると、自分の将来像を設定して、プレゼン学習を中心に進路を切り開くコミュニケーション能力を育むプログラムを行う。このプログラムで「プロ野球選手になる」という目標を掲げ、実現させた卒業生もいる。
大野さんは「島の起業家教育」をしっかりとした教育事業化することを目標に掲げる。「どうすれば教育で稼ぐことができるのか。ビジネスモデルを考え、稼ぐ仕組みを作るためにこれからも色々なことを実践していきたい」と語り、経営する会社のwebには「地域をベースにしたキャリア教育は、100年続くふるさとをつくる」と信じています」とある。起業家マインドを育成することの本当の意味が大野さんの挑戦から大いに伝わってくる。周防大島だけでなくすべての地域にあてはまるそのことに学ぶべきことは多い。

大野 圭司 / 株式会社ジブンノオト代表取締役

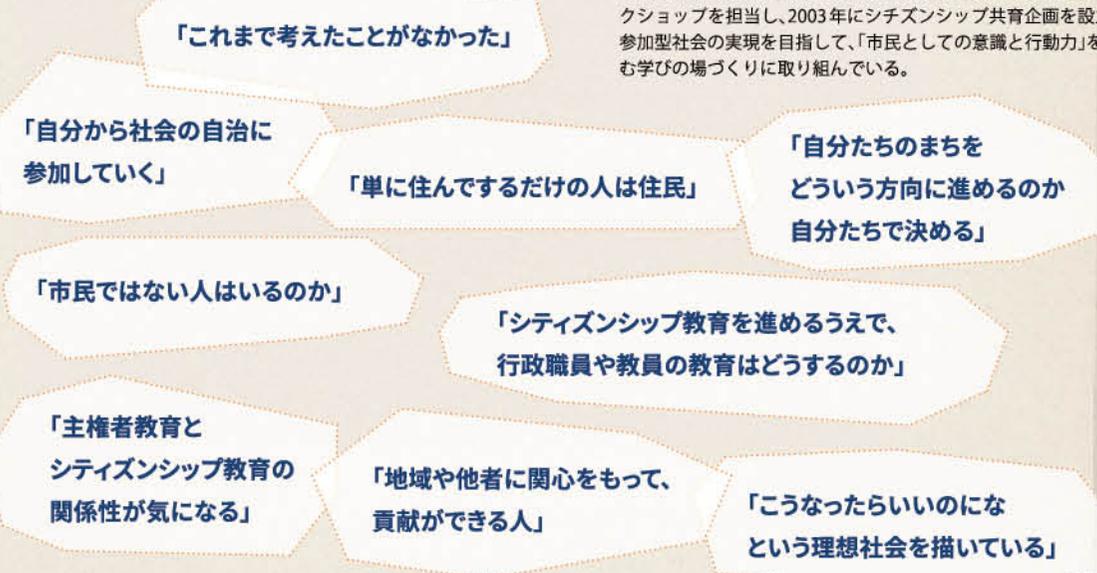
1978年、山口県周防大島町生まれ。15歳で「島おこしを仕事にする」と決意。大阪芸術大学環境デザイン学科卒。2004年に東京からUターンし、島おこし事業を開始。2013年に株式会社ジブンノオトを設立し、周防大島を拠点に、小中高大・社会人までの一貫的な地域創生型「起業家教育」の開発、運営、支援を手がけている。2018年、経済産業省「創業機運醸成賞」受賞。

「みんなで取り組む地域連携 - 岡山のシティズンシップ教育を考える」

「市民である」と感じる人はどんな人か？



めまぐるしく変化する現代社会において、新しい社会をつくりだす子どもたちが将来、市民としての十分な役割を果たせるように、近年、シティズンシップ教育が注目され、日本でも学校教育に導入されてきています。しかしながら社会では、まだまだ認知度は低く、浸透していないのが現実。「シティズンシップ教育って何?」「ほんとうの「市民」になるってどういうこと?」を川中大輔氏をお迎えし、参加者みんなで考えました。



and F 教室レポート



講師：川中大輔
(龍谷大学社会学部現代福祉学科講師/ シチズンシップ共育企画代表)

1980年、神戸生まれ。関西学院大学社会学部卒、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修士課程修了。2001年から全国各地で市民教育や協働まちづくり、NPOマネジメントに関するワークショップを担当し、2003年にシチズンシップ共育企画を設立。参加型社会の実現を目指して、「市民としての意識と行動力」を育む学びの場づくりに取り組んでいる。

住吉町の家 分福



坂ノ上博史

SAKANOUÉ Hiroshi

1978年生まれ、岡山県倉敷市出身。金光学園高等学校、早稲田大学第一文学部卒業。在学中よりIT系事業協同組合にて政府系の調査事業にあたり、起業家育成施設マネジャー、経営コンサルティング会社取締役を経て、独立。自らも地域プロジェクトの企画・運営を手掛け、住吉町の家「分福」では、高梁川流域と首都圏との産官学連携により事業を推進している。

一般社団法人高梁川プレゼンターレ代表理事/
一般社団法人高梁川流域学校 理事他。

分福 WEB <https://bunbuku.org/>

倉敷美観地区の外れ、昔は住吉町と呼ばれた場所。一軒の古民家を改修する中で、昔ばなし「ぶんぶく茶釜」をかたどった昭和生まれのストープがみつかった。愛らしいような、すっとほけたような、そんな表情をしているが、この家が建てられた大正15年(築93年目)から、一時は空き家にもなったこの建物を守ってきたように感じる。

平成も終わろうとする今、インターネットが世界を覆い、私たちの生き方、働き方、価値観をも大きく変えつつある。この建物も住宅からコワーキングスペースに生まれ変わり、その名称を「分福」とした。発音もかわいらしく、気に入っている。シェアリングエコノミーに通じるコンセプトも併せ持つ。

スマートロックで出入りし、畳・ふすま・床の間のある部屋で、パソコンを広げてテレビ会議をする。窓から望む庭には四季の花が咲き、虫や鳥たちも来訪する。スマートスピーカーに話しかければ、消灯完了。古民家に宿る日本の知恵に、IoTを組合わせて、伝統と革新の融合を狙う。こんな場に集う仲間と次世代を考え、未来をつくる。新しくも懐かしい日本の働き方を、倉敷から提案していきたい。

表紙イラスト 玉島の老舗「松濤園」が施設オープニングのために詠えた和菓子。銘「分福」。

Editor's Column

■明治大学教授の齋藤孝氏の「本を読まない人たちが知らない人生」というコラムを読みました。それによると、「大学生の53.1%が1日の読書時間についてゼロだと回答し、平均は23.6分、一方で1日のスマートフォン利用時間の平均は177.3分」だそうです。まずは、この衝撃的な数字にびっくりです。自分自身も、学生時代は多読派でしたが、今では読書時間よりはるかにスマホ時間過多になってしまっています。■齋藤氏は、読書は生きるための基本であり、人間が自己形成をしていくうえで、いかに大切かということを説かれています。そして、自己形成のためには読書をだけではなく、自分の頭でモノを考え、行動することが重要だと言われています。■引用を続けると「本というのは基本的に、『偉大な他者が書いたもの』です。それらを読むことで、自分の思考を深め、精神を高めることができる。(中略)読書とは、他者の話に耳を傾け、自分自身と向き合うことです。その他者が偉大であればあるほど、一流の思考を自分自身に取り入れ、人間としての骨格を形成するきっかけを与えてくれるのです。」■昨年ベストセラーになった「君たちはどう生きるのか」(吉野源三郎著)を読みましたが、通じるものを感じました。スマホから毎日流される膨大な噂話に時間をとられることなく、偉大な先人のメッセージをじっくりと噛み締め、自分自身の頭でしっかりと考え、悩みながらも行動していこうと今更ながら考えた次第です。(O)



公益財団法人 福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL:eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.66 2018.5.25

編集・発行：
公益財団法人福武教育文化振興財団
制作：株式会社吉備人
デザイン・イラスト：タケシマレイコ
印刷：株式会社三門印刷所